

ICT 環境雑感

著者	見上 一幸
雑誌名	宮城教育大学情報処理センター研究紀要 : COMMUE
号	22
ページ	1-1
発行年	2015-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1138/00000553/



ICT 環境雑感

国立大学法人宮城教育大学長 見上 一幸

21世紀の知識基盤社会を支えるのがICTの発達であり、大学という教育、研究を使命とする組織においては、最先端のICT環境は必須です。そのICTを安心して利用するには、確かなセキュリティーの上に安定した維持管理が前提であり、本学情報処理センターのみなさんには、情報を空気や水のごとく、安心してネットを介して活用させていただける環境をつくっていただいていることに改めて感謝したいと思います。

ICT環境の整備はICT活用のみならず、さまざまな波及効果をもたらします。平成24年度、25年度に学校教育におけるICT活用の推進のために、資源の集中的な投資を行い、附属学校のある上杉キャンパスのICT環境の整備を行いました。その結果、国内でも先進的なレベルのICT環境を構築できただけでなく、附属学校の教育活動全体への活性化につながっているように思われます。特別支援学校ではICT活用ブックが大学評価の中で注目され、附属小学校はいろいろな教科の中での先進的な活用から英語教育強化の取り組みへ、さらに附属中学校は「技術・情報協働創成科」について文部科学省の研究開発指定校に指定されるなどの成果がでており、本学のCOC（Center of Community）事業や教育実習を進める上での基礎スキルとして、活かされようとしています。

ICTの活用は日進月歩で進み、大学の教育研究環境も1年毎に変革が進むと思われます。国は大学入学試験改革により平成31年、32年から実施予定の「高等学校基礎学力テスト（仮称）」や「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」について、CBT（Computer-Based Testing）方式の導入を検討しています。大学の授業も、従来の知識の伝達型の授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ行う双方向性型授業へ向かい、学生が主体的に問題を発見し、自らの力で解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が進むと思われます。卒業生は教師になってからも、生涯にわたって自ら学び続け、その質的向上を目指す教員（イノベティブ・ティーチャーと呼称）、地域の教育資源を活用し地域に貢献できる教師であることが期待されます。本学のCOC事業では、ICT環境は重要なインフラであり、その中核であるCIT（Cloud for Innovative Teaching、宮城教育クラウド）システムは、すでに基本設計を完了して本格的活用には備えています。これからは一層、地域に貢献できる教師の育成が期待されます。

現在、本学が創立以来追求してきた「生涯学び続けようとする教師」の実現、そして「大学が教師のための生涯の母港」であるために、ICT環境の整備はその前提となるものと考えます。すでに述べたように、学部および大学院教育では、学生たちの「アクティブ・ラーニングへの転換」が重要です。そのためには、図書館や各教育研究センター等の施設を有効活用するためのデジタル化、アーカイブ化も重要であるとともに、外部に開かれた情報の流れも重要です。平成27年度は、学術情報ネットワークであるSINETの高度化・高速化が図られます。新たなSINET5では、すでに一部の大学において導入されているクラウドのサービスも行われるということです。本学においてもクラウドの利用は、業務効率化の上から一考に値すると考えており、その在り方について、情報化推進室や情報処理センターを中心に、第三期中期計画を策定する中で検討されるべき事項であると考えます。いずれにしても常にセキュリティーの高いシステムを維持管理、さらには啓発のために、人的な配置は必要であり、学内のみなさまの知恵や協力を是非お願いしたいと思います。